

眞生

第五卷 第十二號

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◎宗教の生活には自づから二つの方面が展開する。其の一は身自らを如來の大徳に歸命して、専心念佛の一行に合掌するの方面と、其の一つは其の合掌のあまり、歸命の後ち。自ら此の慈光をたゞえて、多くの人々に此の喜びを分たんとするの働きである。

◎恰もそれは一つの軍隊に於て、その命令を中心として、その命令に耳傾くるの方面と、その命令によつて、活動せんとする方面とあるが如きである。前者を如來への歸命とすれば、後者は如來より出でたる、社會生活への活動である。

◎即ち吾人の生活に於て、前者は自らの力なきを感じ、自らの淋しさを感ずるときに、自づから如來への合掌となり、歸命となつて、如來に救はるゝ生活となり、後者は夫によつて信仰の生長となり、活動となつて、理想の生活となつて來るのである。

◎之を如來中心の光明の生活と云ふ。眞生と云ふのは即ち此の生活の謂である。即ち如來を中心として、現在より永遠に吾人は如來の慈光に攝化せられて、如來の心の如く身自らにも活動せんとするの生活である。

◎されば吾人の生活は一面には常に如來への合掌あり、常に如來への歸命相續となると共に、一面には常に如來を中心として、如來の如き理想を自己の理想として、社會改造の第一歩に全身を献ぐるの生活となるのである。(念)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

目次

- ◆ 一々に如來さまの姿を見る 越子
- ◆ 宗教生活の二方面 (二) 土屋 觀道
- ◆ 吾朋便り 土屋 觀道
- ◆ 吾友に告ぐ 東光 山人
- ◆ 辨榮上人の七回忌に就て 土屋 觀道
- ◆ 御案内及びお知らせ
- ◆ 傳道日割

●年の暮の一月は同じ一月でも短いやうであります。それと反對に病院にでもゐて暮す一月一晩は同じ一月一晩でも非常に長いやうであります。

●そりや別に月日に永い短いがある譯ではなく、自分の身にやる事が多いからであります。私は五十年を長く暮す人より、短か過ぎて困つたといふ位に暮した人の方が幸せだと思ひます。

●水い短いは分別思量の世界で、物事に本當に熱注した時は時間を忘れてゐます、時間を忘れたとき時間そのものとなつて居り、時間と最も親しいのです。時間を超越した時、實は時間全體を擲んで居るのであり、時そのものを體現して居るのであります。信仰とは正しくこの「時間を忘れる」ことであるものと成つて來ます。

●同様に空間を亡じた時、空間全體を領有することが出來ます。

●何處にでも、何時でも生きる——宗教は此の一言に盡されてゐます、それが無量壽、無量光の意味でせう。

●そんな生意氣なことを云て、そんなことが出來るかど問ふ人があるかも知れませぬ。而し此の自覺に立たなければ眞の落付きと眞の力とは出て來ませぬ、落付きとは安落付のことでも馬鹿落付のことでもなく確固不拔の大安住に住すること、此不動の一點より初めて何物をも打ち破つて進む無礙の大活動が湧いて來ます。

●普通の名利益問題はどうでもよく、此の活動の裡に眞實の名利は自然に正しく解決されて來ます。(尅)

●名古屋驛で恰度お晝に四十ばかりの男の人と汽車に乗り合はしました。

●對手の方は早速御辨當を買って喰べ初めました、百姓らしい人です。私は本を讀んでゐます、偶々信仰設が始まりました。頻りに慈悲の有難い事を讃嘆せられました。その内に辨當を喰べ了て空箱をポーンと腰掛の下へ投げ込まれました、その時チラと見ると可成り澤山の御飯粒が附いてゐる儘でした、私は何だか冷やりつとしました。

●信仰談とは所謂「信仰の話」ではありません、此の飯一粒を大切にすることです。一分の時間をも無駄にせないと云ふことです。如來さまとは雲の上に乗んでみえる方ではなく、この現在御飯粒となつて目の前へ來てみえるその方の事です。

●私には仕うも怖ろしくて錢一錢、水一杯をもおろそかにする事が出來ませぬ、それは直ちに如來さまを殺し、物を殺し、自己を殺す事でもあります。單なる一粒、單なる一杯でなく衆縁法界を殺し、破る事でもあります。これを直ちに價値に轉ずることがなかつたならば三寶を毀り不信する事でもあります。

●信仰なんテ所謂口先きの事でも、頭の中の事でもなく、一切の生命恩徳と自己とが、同時に生きるか死ぬかの瀬戸際を一々體現してゆく活事實であります。

●佛の存在を證明し得ても、自分の振舞てゆく實感實修の中に一々如來さまが見えて來なくて、未だわがものとなつたのではありません。如來さまがわがものとなつた時、私が如來さまのものとなつたので、佛の功徳が我が功徳となり、我が功徳が直ちに佛の功徳となつてゆきます。

●信仰は飽く迄生きてゆく事實であつて、血の氣のない論議ではありませぬ。未來に行て仕うなるの斯うなるといふ事ではなく、常に此の佛功徳に充足してゆく事であり、そこは念佛せず居れず、「お念佛」にならして戴けます。(尅子)

宗教生活の二方面 (二)

土 屋 觀 道

一、宇宙と人生

私は初め佛教とさへ聞けば死んでから先きのことを説く教だ位いに考へてゐた。之は私の故郷が死後の宗教のみを説く所であつたのが大いなる原因である。然に其後稍長ずるに従て、未來教以外に眞言宗や日蓮宗の現世の祚りや、又禪宗といふ自己の悟りを中心とする宗旨などのある事をおぼろにも知るに至つた。其後十年を経て、初めて私は自己の問題として人生の意義を求め、永生の要求と價値の生活を生むるに至つて、始めて、幾分か佛教の何物たるかを知るやうになつた。それまでは多くの佛教を見ることは全く外からのみの見方であつて、決して眞の内容そのものを我がものとして見やうとしたのでは無かつた。

然に私は幸にして、宇宙の生命を神と見た、そしてそれを佛と見、天と見て、之に合掌することを得て、その時始めて、私は宗教と云ふものゝ味を知つた。それは恰も、赤子が母親にだかれたやうに、御親の大悲に一切を任かせた味であつた。それが私の廿一才の時である。喜べ樂しめ我等は天國の中に在り一切を如來に打任かせて、たゞその中に私は出来るだけの最善の路を精進するばかりであつた。そして私は思つた、一切の宗教的偉人と云はれる人たちも要するに此の道に生きた人々に外ならぬ。釋迦

も孔子も基督も、此の外に天を見、佛を見、神を見ると云ふことはない。従て凡そ之等の人達も此の宇宙の生命に合掌し、此の宇宙の本心を中心として一切に及ぶより外はない。

何となれば、私共は宇宙の本源より來る。従て宇宙を外にして私は無く、私は宇宙生命の現はれである。従て萬法を離れて宇宙なく、宇宙を離れて萬法はない。然ば萬法の一員たる私は亦萬法の本源たる宇宙と共に不滅である。然ば私の身心がたとい如何様に變らうとも、それは姿の變化に過ぎないのであつて、私そのものゝ生命は宇宙と共に不滅であり、宇宙と共に永生であると。この時それが私の入信の初めであつた。尤も私はそれ以前から宇宙の宏大にして無邊であるのに驚いた。又此の宇宙の現象が時間空間に相關して變化して行くにも驚いた。而も其の變化たるや實に驚くべき宇宙生命の進展であつて、天體の運行、四季の變化より、萬物の成長、生滅に至る迄一として其の道によらざるなく、その力によらないものゝないことを知つた。乍然宇宙の生命と自分の生命とが一體であると云ふことを悟つたのはこの時が初めてある。私は宇宙の一員として、宇宙の絶大なる力と法則と恵みとの中に生長しつゝあることを直觀し、私と宇宙とは一體であり、私と萬有とは相關し、萬有と宇宙とは一體であると信知した。而て私は萬有を宇宙生命の發現で、私も亦宇宙生命の發現と見た。於茲、私は宇宙の一切を此の宇宙生命に託して、其の中に私の生活最高の眞理に生さればよいと信じたのである。

二、佛子の自覺

かくて私は一切の萬法は宇宙と一體である、即ち宇宙を離れて萬法なく、萬法を離れて宇宙はない。

宇宙は萬法の本源であり、萬法は宇宙の現はれである。然ば萬法の中の一員たる我はまた萬法の本源たる宇宙と一體にして、我も亦宇宙生命の表現であると云はねばならぬ。然は宇宙大なりと雖も我を離れて宇宙なく、我は宇宙の本源より來るもの、然に佛教で我を無我といひ、我を因縁生のもと云ふのは何故か。我は果して無我であらうか、又我は果して單なる因縁所生のものであらうか。宇宙を一つの生命とすれば宇宙は確に一つの大我である。宇宙を大我とすれば我はその大我より來るもの、大我と生命一にして大我の分身と云ふべきである。我は宇宙の生命より來るもの、宇宙生命の表現ではないか。然は我は單なる因縁の所生にあらずして、宇宙の本源生命より來るもの、寧ろ宇宙の子として、宇宙と共に永劫に榮え行くべきものである。されば吾人の本心は宇宙の本心と一なるもの、常に宇宙の生命に生き、宇宙と共に發展せんことを希願して止まないものである。汝自身を知れとは此の自己を知れとのことである。されば我を以て無我と云ひ、我を以て因縁の所生と云ふは未だ眞我を知らざる自己の肉身のみ自己と執してゐるのに對する反省の言葉に過ぎない。即ち肉身の我を以て若も我なりと執するならばそれは確に迷執の我である。而してそんな我ならば許より無我に相違なく、又因縁所生の我に相違ない。乍然今私の云ふ所の眞我なるものは、それこそ自己そのものとしての生命であつて、此の生命たるや、即ち宇宙の生命と其の體を一にし、その質を同じうする。然ば此の宇宙の生命を人格として見來るとき、其の宇宙の生命を受けて生れた此の私はそれこそ即ち宇宙生命の分身として、宇宙の子なりと云はねばならぬ。從て宇宙の子としての私は宇宙の子としての生命と人格とを有す、此の生命と人格こそは即ち佛教で云ふところの佛子であり、基督教で云ふところの神子である。從て牛の子は牛であり、馬の子は馬なるが如く、又神の子は神であり、佛の子は佛である。

然に我國では人の子は日迹と云ふ説もある。日迹とは日の迹と云ふことである。日は即ち日、迹はその垂迹である。天照大神を天が下を照す宇宙の生命として、拜し奉るとき、太陽のその如く、萬有を照す宇宙の大神として我々の祖先に之を崇めたのはたとひそれが神話としても、其の神話の中に之ほどの絶大なる神格を吾人の祖先として見たことは、我大和民族の宏大なる心とし、其の敬愛して惜かぬ所である。まして、その神を單なる權力の神、支配の神としてでなく、直に吾人の氏神とし又、祖先として暖かき慈母の女神として之を祭り、自らをそれらの子孫として、日迹と呼ぶことは自らを知るの亦大なるものと言はねばならぬ。ヒコ（日子）と云ひヒメ（日女）と云ふも又その面影をのこしたものである。而も歴史は連綿として此の事實を語り、此の土を神國として自らに尊ぶは已に吾人の熟知するところであらう。而て佛教の佛子正にこゝにあり、佛教の我國に隆ゆるも亦宜なりと云ふべきである。而も一度宇宙的精神を以て、この人類の將來を思ふとき、吾人は必ずしも我が國のみを以て神國とすべきではなく、そこには一切が神であり、神の子としての一切でなければならぬ。そこに博愛の心動き、正義の道自づから立つを見る。

然に有史以來、果して幾人かこの神意に叶ひ、この佛意に叶つた人があるであらうか。普通佛陀とは即ち此の道を自覺した人を云ふ。如來と云ふも亦此の眞理より來たものとの意に外ならぬ。然に神の子にして神の行ひを爲さず、佛の子にして佛の行を爲さないならば、吾人はこれを神の子、佛の子なりと云ふであらうか。日迹の意味も亦然りである。思ひ一度こゝに至ればさすがに我等は罪の子、貪慾の子

と云へ云ふべきでないか。

乍然それにしても、其の源を尋ねれば吾人はもとこれ如來の法王子、之を知らないのは永劫の不覺である。友よ我等はいつまでも之を知らず、肉慾の奴隷となり、財慾の奴隷であればよいのであるか。一刻も早く自覺すべきはこの佛子の自覺である。

三、如來の大悲

而もかゝる時にも尙、吾人を念ふて止み給はぬは宇宙の生命たる如來の大悲そのものである。一切を大悲の中に見そなはし、一切を慈光に包んで捨て給はぬのが如來である。如來の心は吾人をして、如何なる場合にも如來と等しき自覺を得しめ、永遠の生命と價値の生活とにその人を生かすにあるのである。古來佛教を見るに二つの見方がある。聖道門と淨土門とが即ちそれである。前者は勇猛の聖子、即ち賢聖の童子に適し、後者は懦弱にして自ら立つことのできない童子に適す。この二は皆これ如來の大悲から出でたものと見る。何れを勝とし、何れを劣とするかは其の見る人の見方如何による。必ずしもその初めから其の法の勝劣を定むべきではない。乍然それと云ふのもたゞ暫くの初門に過ぎず、やがては一味平等の宇宙の法海に出で、等しく如來の佛子として、自由に生くると云ふことは、決して差別があるのではなう。

一は如來に歸依して、戒定慧の三學によつて、天地の大道に合せんとし、一は如來に歸命して、如來の靈化を蒙つて自己の生命を生かさうとする。そこに二つの相違はあるが、自ら佛陀たらんとする最後の目的に至つては一つである。

乍然同じ一つとは云ふものゝ、その一生の行程は自づから、自力門と他力門との相違となる、一は自らの力を根本となし、一は如來の御力を所依とする。言ひ換へれば前者は自らの力によつて、戒定慧の三學により、後者は自らの力足らざるを知つて常に如來の大悲にすがら。一は大人大聖の趣きがあり、一は小人赤子の趣きがある。罪の子と罪き子との相違もあらう。

乍然之を如來の大悲より眺むれば、そこには何等の區別もない。凡そ宗教の生命は、宗教そのものの概念でなく、宗教そのものの實感でなくてはならぬ。従て、如來の大悲の趣くところ、又自らその人その人の機根相應の教法である。従てその法たるや、同じ解脱の法ならば法そのものに優劣の違ひはない。其の人其の人に於ける相應の法こそは、即ちその人に於ける最勝の法である。乍然世に惱める人は多く、力なき人は多い。そして又、老若男女、貴賤貧富を問はず、如何なる愚かなるも賢さも、罪あるも罪無さも等しく共に救はれて、宇宙の本源に入ることは、如來の本願に託乗して念佛の一行に勝るものはなう。

四、我等の理想

乍然かく云へばとて、吾人は單に淨土門を賞揚して、聖道門を誹謗するのではない。若し自分達にして、如來にすがらず、自ら三學を修して六度を萬行し、自ら以て佛位に立つことが出来るならば、自分も之を尊敬して立たうと思ふ。乍然未だ之を爲さんとして爲し能はないものを如何にすべきか。そこに念佛の救がある。即ち吾人は、そこに彌陀の本願を聞くことを得て、始めて如來の救ひを得、宏大にして無邊なる如來の大悲に腹ふくるゝを覺ゆるのである。如來の大悲本願が無かつたならば吾等如何でか

をつかまざる吾人の本心は永久に落つかぬものがあるではないか。

友よ、吾人は宇宙の現はれ、宇宙生命の表現なれば、此の身此のまゝが即ち宇宙本佛の顯現、知れ。善も悪も靜に之を觀すればさながら瑠璃光とぞ見ゆる。光は萬法の本源、即ち本佛の生命である。一切の善も一切の悪も、之を要するに萬有の進化、向上の上より見れば、善惡そのまゝが、即ち宇宙生命の發展である。従つて、一切萬有の生滅も觀し來れば皆これ宇宙生命の進展にして、一として採るべきもなく、捨つべくもない。

されば、友よ、吾人が身心も亦これ宇宙の本源より來る。即ち宇宙生命の表現なりと信知せば一切は如來の慈光と輝いて、煩惱も即ち菩提と變じ、生死も即ち涅槃と變るべし。見よや宇宙の大道を。そこには如來の光り輝く。永生の光り、價値の生命は、すべて皆天地の本源より來らずや。一切は萬有の本源より來る。生も死も、皆これ天地の自然にして、又これ如來の光である。善も悪も、喜も悲しみも、一切は皆これ如來の光とぞ見ゆる。

友よ心して汝の本心を見よ、汝は永劫の光ならずや。永生の光は汝にてありき、如來の生命は即ち己が生命である。一切の善一切の惡汝の本心より之を熟視すれば、皆一として捨つべきはない。善は善として光となり、惡は惡として光となる。喜も悲しみも、怒も腹立も、之を如來の大悲に感ずれば一切は光明の生活である。

されば、友よ、汝自身に歸れ、財を捨て、肉を捨て、汝自身の生命に歸るべし。そこには永生の光り輝き、そこには神人の光り輝く吾人は宇宙の本源より來る。吾等の生命は宇宙の生命である。

悠久たる天地の間、友よ、我等は何を爲すべきぞや。一度過ぎて又と歸らぬ今日の一日、友よ、我等は何を爲すべきぞ。

古人云はすや、春は芽ばへて、夏茂り、秋は實りて冬藏む、太陽は高く空に輝き、地は廣く人を戴す。一切の萬有、感じ來れば皆我が爲めに在らざるはない。

そこには釋尊も合掌し。孔子もキリストも跪づいてゐるではないか。否、單に釋迦・孔子・キリストばかりではない。凡そ一切

考へます、何卒御縁合せの上是非此冬數日間なりとも御人格にひたらせて下さいませ。右伏て懇願申し上げます。失禮でございますが大抵は月に一回位は御出浮きにならずにやうか。終りに先生の御健康にあらせられて後進者の活路を御先導下さいん事を祈つて止みません。

■高松高商 堀江義廣様
合掌愈々パンフレットを發行することになり目下印刷中です。「合掌の世界」を次號に掲載する事になりましたから今年中に原稿を送つて戴けば結構です。當會パンフレットの廣告紹介を餘白があれば來月號の眞生に掲載して戴きたいと思つておます。私共の青年會員を是非今年中に上人を中心として座談會を開きたいと思つて熱望して居るので、工藝の山本校長も御來高の節を一度講演をお願いしたいとのことです。岡山の中學校の先生は道友二、三引き連れて参るといふのです。

■彦根高商より
謹啓時下向寒の初先生には益々御勇健思想善導の爲御奮闘の段々實陳者過般本寮に講話會開催候節には御多忙中にも不拘態々御立寄り破下長時間に涉り極めて有益なる修養講話を賜り多大の裨益を得候段深く感銘仕り候致々營々勉むる傍か、る精神上の糧を得る事も緊要の事と存じ今後又々御指導を願ひ度々熱望致して居り候間何分共宜敷願上候先づは乍延引御禮申上度亂筆如此に御座候也
敬具

■岡山縣 淺野一二様

拜啓
秋冷の候相變らず先生には御傳勝の御事と存じます
此度大阪支部古家一男先生の御照會に預りました、眞生同盟に加盟させて頂くことに致しました。

土屋先生の御指導せられる眞生同盟あることを新聞紙上にて承りましたとき、眞に生きんとして努めてゐる私は、云ひ知れぬよろこびを感じたのであります。

現時の思想界の頹廢せるに直面致しまして、常に前途を憂えずにはあられません、この時に當りまして、私達はごこまでも旺盛なる究理心と、眞面目なる努力によりまして、更に一歩を進め、この眞生への同化運動に盡したいものと存じますいつか先生の偉大なる人格に接する機會を得まして、意を全うすることが出来ましたら此上もないことと存じておます。今後何卒御指導下さいませ候お願ひ致します。

(敬具小爲替堂岡也同封パンフレット「眞生」
誦代)

■伊勢大石 谷口年泰様
先日は私ごときものゝお願ひを御聴下さいませして遠路わざわざに來臨の榮を賜り實に有り難く御禮の申上げやうもありません。
山奥の殊にあぶら家の事とて何の風情もございませぬ、失禮ばかり致し誠に恐縮でございます。

の生とし生けるもの、誰か此の光を仰がざる。一切は之より發し、又一切は之にぞ歸る。自己そのもの、生命である。

肉慾何物ぞ、財慾何物ぞ、靜に之を觀ずれば偏へに自己を完成せん爲めの財糧に過ぎぬ。然に肉慾の爲めに反て自己を損じ、財慾の爲めに反つて自己を亡ぼさば、生存の意義何所にありや、吾人は肉慾の奴隸ではない。又財慾の奴隸ではない。

靜に人生を觀ずれば、實に人生は夢の如し、一度過ぎて又と歸らぬ一生の淋しさよ、天地に輝く自己の本願を知らざるものは、人生の一生また永劫の悲しみなるべし。友よ、過ぎにし人生を反省して、來るべき一生の如何に短かさかを思ふべし。

肉身貴きにあらず、之を意義あらしめて始めて貴きなり。財寶貴きにあらず、之を價值あらしめて始めて貴きなり。然は友よ、我等は如何に生くべきぞや。凡そ人とし人と生れ來て、生れがいもないものよ、汝の本心に歸るべし、汝は宇宙の本源より來る。宇宙の本源は即ち汝の本源ある。財も肉もそは決して汝そのもの、生命ではない。吾人は先づすべからず、宇宙の本源に歸らねばならぬ。宇宙の生命こそ即ち自己の生命ではない

か。(大正十五年十一月二日)

× × × × ×

辨榮上人の七回忌に就て

土 屋 觀 道

辨榮上人が北越の柏崎で御遷化になつてから、もう足かけ七年になる。各地の道友たちが故上人の御徳を慕ふて、それ／＼に七回忌念佛會などを營まれるのを見て、今更のやうに私の心にも故上人の事も思出されてならぬのを覺ゆる。して見ると之も亦故上人の七回忌の御蔭かとも云へる。

乍然實を云ふと私の心に上人の七回忌を營むと云ふことはあまりに氣のりのせない事である。それは何故かと云ふと、凡そ佛教の中心はそんな七回忌の問題ではなくして、各人自身の根本解脱が其の中心の問題であるからである。そしてまたそれが故上人の本當の御願いでもあつたではないかと思ふからで

私の努力の足らざるにより聽講者の少なかりし事は實に慚愧に堪えない次第でございます。

然しこの講演會によりまして數多の共鳴者を得られ尙私の信仰に對する誤解も多きは除かれ更に理解を持たれし方さへ出來ました事は實に有り難い事でございます。尙母も非常に喜びました。身も心も貧しき者ではございませうが法の子として何時までも御導き下さいませう伏てお願ひ申上げます。

□越後柏崎 渡邊ハ右衛門様

御忙しい御勞れの所御出被下まして御懇切なる御指導により眞に目ざめし如く殊に岩下君外新しき方々もほんとうに嬉しそうちに然して熱心に念佛致すやうになりました。今度さいふ今度こそ吾が郷へ御上人の眞生の意氣も有識方面へ響き私共もほんとうに恵れしこころ感じ一層心強くなりました。

昨夜午前六時半より例の眞光寺にて念佛感想座談會をやりました所今迄になき盛會にて青年初め約五六十名集りまして一心に念佛やら感想やら實に涙ぐましき迄熱烈さなみてほんとうに嬉しく／＼筆に書いてみやう有りません御上人さま何卒私の心中御察し被下

限りなき慈悲の源たづねれば

念すればわねの粟ののつかみどり
眞は彌陀の光なりげむ

□越後柏崎 渡邊三十郎様

今回上阪の節は奇蹟的に御會ひ致し色々御教

へに預る事が出来且つ大阪の眞生同盟の幹部各位にも御紹介し被下色々御指導被下眞に恵まれたる旅の出來得ました事は喜びに堪へません。昨夜の眞光寺に於ける例會は會衆堂に満ち會員各位熱烈なる事は感激に堪へません。其節小生の今回の惠まれたる旅行の詳細を御話し致しました所一同大に満足致されて居りました。先づは御禮かた／＼右御知らせまで。合掌。

ある。かと云つて私は決して上人の七周忌を營むことを悪いといつてけなすものでもなく、又之をやらぬことを以つてやるよりもましであると云ふものではない。乍然世にはともすれば上人の七回忌のみに心を取られて、身自らの求道の本義を忘れ、殊に念佛三昧會を以つて、七周忌報恩記念にさへせんとするものゝあることは凡そ宗教の本末さへわきまをぬことがらであるからである。

然は私共故上人の跡を慕ふるものは之等に對して如何なる態度であるべきであらうか。それは偏へに故上人の示された、如來眞實の大道に立つと云ふことが一悉人生の本義であつて、それがやがてまた故上人に對する眞の報恩ともなると云ふことである。若しさうでない、近頃の多くの佛教僧侶たちがたゞ單に五十年に一度か百年に一度しか來ない祖師たちの年回のみを五年も十年も前から待ちかまへて之を記念に傳道し、其の記念が一日か二日で過ぎて終へば、また五十年か百年かせねば何事もできないやうな、記念ばかりを待つやうな、念佛や傳道にならぬとも云へぬからである。乍然かくの如きの念佛や傳道が宗教の本質の上から見て、果して何を意味するでありませう。私はかうした事實をあまりに多く今までに見せつけられて居るが故に、故上人の年回を、ともすれば又從來と同じ意味に扱はうとする人のあるを見て、寧ろ哀れにも亦悲しくさへ感ずる一人である。

二

次に、それは暫くそれとして、とにかく近頃の光明主義者の中に、熱心に道を求め、熱心に道を説か

うとする人の多くなつて行きつゝあることは故上人の爲めにも嬉しい事と云はねばならぬ。世には上人を以て異安心の如く思ひ、現に今もなほそれとして之を排斥しやうとする人の甚だ多いことは靜に思へば残念なことではあるが上人の御言葉を借りて云へば、それだけ此の世に重視せられて來たことゝして又喜ばしいことである。乍然それだからと云つて、ことさらは奇をてらい、異を述べて故上人の學説を非理に誘くことは大いに謹むべきことではないか、また故上人の信仰を異安心なりと云ふ人もたゞ徒に其の上人の一節をとつて自らの學説と同じでないかと速断して、みだりに之を惡しざまに批難しやと云ふことは之また大いに反省しなければならぬ所ではないかと思ふ。まして、故上人の門下に於て、ともすれば單なる一二の誤解やら、或は淺薄極まる卑やしき一つの黨派心から異を立て説をして、其の統一を缺ぐものあり、或は徒なる過去の習慣に捕はれて、内輪同士の賞め合に満足して、眞に佛祖の生命を究めない如きは共に反省すべき大なる問題ではないかと思ふ。

三

それはともかく、上人が如何に自らの信ずる所に従つて、全身を其の主義の爲めに盡されたかは實に驚嘆に値する。而もその説は上人自らの體驗を中心として、佛教はもとより、孔子及びキリストにまでも及んでいた。事は單なる古典宗學の概念論ではなかつた。

行住座臥に如來と共に寝ね、如來と共に起きと言はれるときなども、上人自らが現にその生活に生き

て居られる自己の事實を語られるの感があつた。此の意味に於て、宗教的體驗の事實を私共に示された。之は萬卷の書を讀むよりも更に尊い事柄であつた。

乍然、上人の滅後に於て誰が上人の後を受け、誰が上人の道を説くのであらう。自ら上人を信じ、上人を仰いで、其の教を慕ひ、其の人格を損へる人は多いかも知れぬ。乍然、眞に上人の心を心とし、上人の徳を徳として、其の道を語ることが上人でなくては出来ないことである。

世にはともすれば上人を語り、上人の説を模倣して、自ら得たりとなす人もないが、模倣と實感とは雲泥の相違である。幸に上人の遺文あり、其の説れる所を幾分が伺ふことが出来るとしても、其の説の内容と上人御自身の人格とは又見る人によつて各々相違するものあることを知らねばならぬ。

まして、佛教の眞隨は人の信仰や人格を簡單に損えることではない。身自らに於て、如來の生命に歸命して、自ら佛陀の生活に立つことにあれば、私共の理想は上人が如來に歸命して、如來に救はれ、如來を中心として如來の靈化を蒙られたやうに、私共自身がなることであることを忘れてはならない。ともすれば世間の人々は此の上人の心を知らずして、只上人の人格をたゞへ、若は如來の慈光を喜ぶのみにて、未だ慈光のもとに如來の如く、上人の如く身自らが向上し活動すべきものであることを知らないものかの如くである。

四

乍然故上人の宗教はさうした遊びの宗教ではなかつた。その證據には上人の御身の生活を見るがよい。上人はいつも身命を賭しての慈光宣傳の活動であつた。そしてまた、日夜にゆるみなき精進の生活であつた。上人の願文にも是の身と心とのすべてを獻げてつかへ奉らんと誓ひの祈り、それがそのまま上人の生活でもあつた。道の外に我なしとは即ち上人のことである。

上人逝まして、こゝに七年、逝くものは水の如しである。而も自らにあまりに爲すなきの多を懺づる。乍然、それでもかうして上人を偲び、上人の信仰と風格とを自分の心の中心に其の生命として貫くものゝあることは此の上もない私の喜びである。

かうして上人の御姿を自分の心に思ひ浮ぶれば上人の御姿は今も尙昔のやうに私の心には活きて見られる。上人の寫眞よりも上人の遺文よりも、上人は遙かに鮮かに私の心に活きてゐられるので有難い。

それにつけても立つ歳の速きことよ。かくして上人の七回忌を迎えた私たちも、いつしか亦自分にも七回忌の來ることを忘れてはならない。來る歳も來る歳も夢の如く來て、又夢の如く逝くではないか。靜に思へば今年も亦あと僅にして終らうとする。(大正十二年十二月三日、故上人を思ひ出して、學寮の二階にて)

眞生新年號 二十頁

- 一、眞生を年始代りに御利用下さる御方は至急御申込下さい御記名いたします。
- 二、印刷は年内中にして御届けいたします。
- 三、二十部以上の方へは壹部貳錢あて。
- 四、眞生運動の爲めに、新年號は二十頁に増しますから、玉稿御送下さい、そして年賀の贈物として御利用下さい。

例年別時三昧會案内

時 來月十一日より十六日まで。
 所 静岡縣清水港實相寺。
 師 土屋 觀道 師。
 來年は一曆しつくりとお互に修養したいと思ひます。
 前日まで御集り下さい。

高松高等商業學校
 佛教青年會

第一號
 實費拾五錢
 外ニ郵税二錢ヲ要ス

目次 「人生の眞意義」

眞生同盟 指導者 土屋觀道先生

「文化と宗教」 文大教授 小西重直先生

御希望の方は實費にてお分け申上げます

發行所 高松高等商業學校佛教青年會

◆觀道本月傳道日割

- 九、十一日 (岐阜矢島町本誓寺 晝夜別時三昧會)
 - 十二、十三日 (大垣市晝間圓通寺三昧會 夜間淺沼銀行講演)
 - 十六日 夜 (大阪市豊田氏講演會)
 - 十七日 夜 (全北區天神町大阪市民館)
 - 十八日 夜 (尼ヶ崎市大物、圓平寺)
 - 十九日 晝夜 (大阪市上本町眞松院)
 - 廿、廿一日 (名古屋市西區千歲町崇徳寺)
 - 廿二日 夜 (静岡縣燒津光眞寺)
- 定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
 振替口座東京四七二八八番 眞生社
 編輯兼 發行所 土屋 觀道
 東京市芝區愛宕下町四丁目北一番地
 印刷所 金山印刷所
 東京市芝區芝公園第十四號地九番
 發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 大正十五年十二月十一日印刷納本
 (第三種郵便物認可) 大正十五年十二月十二日發行

(毎月一回十二日發行) 第五卷第九號